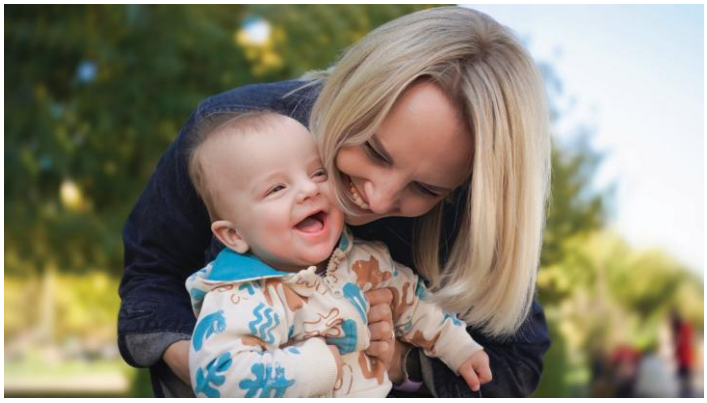
IPPF International Planned Parenthood Federation

From the People of Japan

CHARITY FOUNDATION WOMAN HEALTH & FAMILY PLANNING

救われたお母さんと赤ちゃんの命

ウクライナと日本の協力関係によるSRH(セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス)プロジェクトの成果



ドニプロペトロウスク州在住、ヤレーマの母、インナさん

インナさんには娘がひとりいましたが、夫と相談してもうひとり子どもを持つことを決めました。戦時下の妊娠、出産は、特に頻繁に爆撃を受ける前線地域の家族にとっては、大きな覚悟が必要です。

インナさんは、妊娠34週で突然出血しました。この症状は妊娠期間中のいずれの時点でも危険な状態です。担当の産婦人科医、カテリーナ・カイラ医師は、インナさんを緊急入院させ、母子の命を救うため、その日のうちに緊急出産が行われました。

医師らの専門的かつ連携された迅速な対応によって、帝王切開でヤレーマが産まれました。カイラ医師は当時を振り返り、早産だったのでヤレーマの肺が未発達で十分呼吸ができておらず、早急に処置をする必要があったといいます。

「顔はまだ見れず、かわいい小さなおしりと足が見えただけでしたが、新生児科の先生がすぐにヤレーマを検査してくださいました。対応して下さったすべての先生方に心から感謝しています。本当に奇跡のような出産でした！」と、インナさんは話しています。

ヤレーマの出生時の体重は2250g、身長は44cmでした。今では９ヵ月になり、両親とお姉さんと幸せに暮らしています。

地域医療機関の医師たちの迅速な対応で産科・婦人科系の合併症を乗り越えた３人の女性についての映像はこちらから↓

ドニプロペトロウスク州在住、ミーアの母、カテリーナさん

「長い間、子どもを持つことを夢見ていました。本当に赤ちゃんを授かったことがわかったとき、私は空を飛んでいるような、大きな喜びに満ちあふれました」

カテリーナさんは、約20年間にわたって不妊治療を行い、体外受精のおかげでようやく妊娠しました。また、カテリーナさんは2型糖尿病を患っており、母体も胎児も危険に陥りやすい状況でしたが、妊娠初期からの医師の計画的で最適な処置により、妊娠中毒症も合併症もなく、経過は順調でした。

ところが、妊娠37週で糖尿病による妊娠合併症を発症してしまい、緊急の帝王切開手術が行われました。カテリーナさんは、糖尿病の治療薬として妊娠初期から抗凝固薬および抗血小板薬を使っていたため、手術によって大量出血が起きましたが、医師たちの即時の処置のおかげで危機は乗り越えられました。1週間後、カテリーナさんはミーアと退院することができました。

「出産を支えてくださったすべての医師の皆様に心から感謝しています。ミーアは、20年かけて私たちに会いに来てくれた小さな天使です。今、とてもとても幸せです」

うれしそうにおもちゃを持つミーア
ドニプロペトロウスク州

ミーアを寝かしつけるカテリーナさん
ドニプロペトロウスク州

ザポリッジャ州在住、アニアとデニスの母、ヴィクトリアさん

「ちょうど当直時に連絡を受けました。早産で双子の出産。集中治療が必要であることは明確でした」と、小児麻酔専門医のユージナ・ゴルドビナは当時を振り返ります。

ヴィクトリアさんは、妊娠34週で早期分娩のため産科病棟に入院しました。双子は未熟児だったため、新生児科医と小児集中治療医の診察や特別なケアが必要とされ、専用の医療機器や医薬品が用意されました。

「先にデニスが産まれました。すぐに医師たちに連れていかれましたが、声は聞けて、大丈夫だということがわかりました。アニアは、産まれた時の状態が少し良くありませんでした」と、ヴィクトリアさんは話しています。

アニアとデニスのような早産の場合、医療従事者の専門技術および日本政府の支援を通じて導入されたような現代的な医療機器や医薬品の調達が必要不可欠です。
これらにより、早産や28週以降に産まれた新生児に対して、退院まで質の高い医療サービスを提供可能となりました。

アニアとデニスは、産後1ヵ月間、医師たちの管理のもとで過ごしました。体重も順調に増え、早産による健康上の問題も克服すると、ようやく退院して家に帰ることができました。

娘のアニアを抱っこするヴィクトリアさん
ザポリッジャ州

空を見上げるデニスを抱っこするヴィクトリアさん
ザポリッジャ州

双子をベビーカーに乗せるヴィクトリアさん
ザポリッジャ州

「問題が起きたとき、母親や赤ちゃんに品質の高いケアを迅速に提供するため、現代的な医療機器や医薬品は極めて重要です」ドニプロペトロウスク州産婦人科医、カテリーナ・カイヤ医師

プロジェクトを通じて提供された医療機器や医薬品を備えた婦人科の診察室

3つの事例はすべて成功裏に終わり、母親たちは医療従事者から質が高く専門的なケアを適時に受けられたと感想を述べています。**本プロジェクトは、日本政府の支援を受け、IPPFウクライナ(Women's Health and Family Planning Charitable Foundation: WHFP)によって実施されました。プロジェクトでは、すべての女性と赤ちゃんが必要な医療サービスとケアを受けられる環境づくりに重点を置いています。**

2024年1月1日から12月31日まで「カホフカダム決壊によって影響を受けた紛争地域の医療施設および妊産婦医療・保健サービスへのアクセス復旧プロジェクト」が、ドニプロおよびザポリッジャ州で実施されました。本プロジェクトの枠組みでは、以下の通り必要不可欠なリプロダクティブ・ヘルスおよび産婦人科系医療サービスへのアクセス向上を達成しました。

- ザポリッジャ州およびドニプロ州にて、性とジェンダーに基づく暴力(SGBV)の事例に関するリファラル(紹介)システムのアルゴリズムを開発
- 4カ所のパイロット医療施設に医療機器および医薬品を提供
- 緊急産科・新生児ケアに関する研修資料を作成
- パイロット地域から136人の医療従事者を対象に、緊急産科・新生児ケアサービスの組織化に関する3日間の研修を5回実施
- SGBV被害者の応急処置に関する研修資料を作成
- 201 人の医療従事者を対象に、SGBV被害者の応急処置に関する3日間の研修を4回実施

「実践的で有意義な研修を開催してくれた主催者や講師の方々に深く感謝します。科学的かつ論理的な講義と実践的な内容がうまく組み合わさっていて大きな学びとなりました。私のキャリアでも最高の研修でした！」
ザポリッジャ州の研修参加者

緊急産科・新生児ケアサービスの組織化についての研修を受ける医療従事者